

## スマホとヒトの分かれ難さ-接近と遠ざかりを経て-

福田 雅代

キーワード：スマートフォン、エージェンシー、人格論、モノの人類学、テクノロジー

### 要旨

本稿では現代において当たり前となったスマホを人々が実際にどのように使用しているのかを明らかにし、人類学の視点からスマホというモノを捉え直し、モノの人類学的研究に知見を加えることを目的とする。

第1章では本研究の目的や、それに至った背景、意義を述べる。第2章ではモノの人類学的研究の系譜や、本稿の分析で中心的に用いるモノのエージェンシーとモノに人格が分散する理論、スマホに関する研究事例をまとめ、本研究の独自性を示す。第3章ではスマホがどのように普及してきたかを振り返り、現代のスマホに関する社会状況を記述する。第4章では調査協力者について、調査方法、調査の際の倫理、安全上の注意について述べる。第5章から第7章にかけては調査の結果と分析を記述する。まず第5章ではいかにスマホがヒトと密接に関わり合っているかを記述し、モノそれ自体の存在が無視されながらそれが利用されることについて論じる。第6章ではスマホとヒトの距離がさまざまな仕方で調整されていることをエージェンシーの理論と関連付けながら分析する。第7章では調査協力者の実際の SNS への投稿やホーム画面を分析し、スマホに拡散する人格について論じる。最後の第8章では調査の結果と分析を総括し、現代におけるスマホというモノの存在について考察する。スマホとヒトは時には近づき、時には遠ざかりを繰り返していくうちに、両者は切り離せない関係になる。そしてスマホは現代人の一部とさえ言えるような存在になる。